

P-061

臨床工学士の採血業へのかかわり

日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター¹⁾、
東京都赤十字血液センター²⁾

石橋 梢¹⁾、張替三千代¹⁾、延島俊明¹⁾、
柴田玲子²⁾、会川勝彦¹⁾、中島一格¹⁾

【はじめに】臨床工学士は平成24年度ブロック血液センター設置の折、全国に先駆けて関東甲信越ブロックセンターで採用された。臨床工学士は生命維持管理装置の操作及び保守点検を行う事を業とする医療機器の専門職として1987年に制定され現在では病院内にはなくてはならない職種として認知されているが、世間一般や血液センターでの認知度はまだまだ低く、存在すら知らない人が多い。この度、臨床工学士として採血業へかかわる機会を得たので報告する。【内容】現在、主な取組みは看護職員を対象とした成分採血装置の初期教育訓練とバリデーション・キャリブレーションである。看護職員を対象とした成分採血装置の教育訓練は、装置の構造、原理、採取工程など座学を含め、日常点検、キットの取り付け、データ入力、アラームの対応等のトレーニングをメインとする1機種1日の課程と2日間のフォローアップである。これまでに試験運用として東京都センターに入職した延べ20名を対象に初日終了後のアンケートを行った結果は概ね好評であったが、OJT教育担当者からは様々な意見があがり改善が必要と思われた（～2015.3）。また、バリデーション支援として全血採血装置の管理ツールと手引きを作成し運用を開始した。ツールを用いることで作業を簡便にするだけでなく、バリデーションの適否を自動化したことで安全に業務に取組めるようにした。【考察】成分採血装置の教育は新人だけではなく、機器の適正使用の為に継続的な実施が重要である。また機器の適正な運用のためのバリデーション・キャリブレーション業務は、各センター独自の方法が混在する状況で様々な課題を抱えており、関東甲信越内の業務統一化を目指す必要があると考えている。これからは各センターの意見を集約し採血業に係わる機器の適正な使用と運用に役立てるよう努めていきたい。

P-062

移動採血出発前の採血課職員の負担の軽減をめざして

山口県赤十字血液センター

伊藤繁子、斉藤江里、杉山理恵、吉次圭佑、
廣政千代、桑原高史、藤井輝正

【はじめに】当センターの移動採血車の稼働は毎日2～3台で、献血会場が点在しているため移動時間が長く、出発時間も早い。現システム導入前は準備時間に40分要していたが、導入後は手順の変更により60分と増え、肉体的・精神的にも負担が大きくなった。そこで準備方法の見直しを行い、時間短縮する事で採血課職員の負担を軽減しようと考えた。【方法】対象者：採血課職員19名。期間：2015年2月1日～5月20日。方法：改善策1. 移動採血車内の資材の定数を決める。2. 必要物品のチェックリストを見直す。3. 「物品補充チェック表」を用意し、帰着までに記入し、帰着後補充する。4. 次回移動用準備物品の定数を決める。改善後、準備・後片付けの時間を調査した。課職員の負担が軽減されたかアンケートを行った。【結果】時間調査の結果は、朝の準備時間39分・帰着後の片付け補充時間22分だった。3人体制で、午後の血液を持ち帰り受け渡す作業も増えたため、片付け実時間はもう少し短い。資材の定数化を行い、チェック表を作成し活用する事で、物品の不足なく短時間で次の準備が出来るようになった。号車毎の管理をやめたことで、資材が5台分から3台分に減り、管理しやすくなった。資材室のレイアウトが整備され、準備がしやすく業務の効率化に繋がった。出発60分前から準備していたが、当日朝の準備が出来ていることで、改善後は50分前で可能となった。帰着後後片付けに加え、次の準備を行うようになったため、帰宅時間は遅くなった。【考察】翌日の準備を行うことで、不足物品はないか意識して日々の業務が行えるようになった。改善前の「その日あれば良い」から「次の勤務を考えて準備」へ意識を変えることができた。改善前より、帰着後の後片付けに次の準備時間が加わったが、移動採血車の出発時間が早い中で、出勤時間に10分のゆとりができたことは、肉体的・精神的負担の軽減につながった。

P-063

血液事業情報システム導入における採血現場での取り組みについて

大阪府赤十字血液センター

中野芽生、酒井香代子、松崎恵美、
高田知恵美、塚本昭子、首藤加奈子、
白髭 修、神前昌敏

【はじめに】2014年に血液事業情報システムが導入され、大阪センターでは6月11日から運用を開始したが、導入直後より通信不良、機器不良等のトラブルが多発した。これらの経験から、移動採血現場でより簡便で安全な運用方法を模索し取り組んできたので報告する。【経過】システム導入にあたり、タブレット端末は無線LAN（以下、無線）による運用を想定していた。ただし、研修環境の段階で通信状態が不安定であることを確認し、移動採血現場でも通信不良が発生したため、急遽有線LAN（以下、有線）へと運用を変更した。有線の場合、通信状態は比較的安定しているが、LANケーブルを長距離間延伸する必要がある。そのため、献血会場の都合やレイアウトによっては、運用が困難な状況が発生した。これらのことから、献血会場の状況によって有線・無線を切り替えられるプログラムを導入した。また、有線であっても移動採血車内の携帯電話ルータからLANケーブルを長距離間延伸する必要がないよう、環境改善に取り組んだ。【方法】検診用と採血前検査用のタブレット端末に、有線・無線切り替えプログラム「きりかえルン」（血液事業本部から全国に配信されたアプリケーション）を導入した。これにより、献血会場の環境によって、有線から無線、無線から有線へと切り替えることが可能となった。また、LANケーブルを移動採血車内から採血車外のボディ側面に配線し、モジュラージャックを取り付けたことにより、簡易な形で車外の端末へ配線することを可能とした。【結果・考察】看護師や献血受付・接遇職員の準備作業が容易になり、献血会場での設営時間が短縮し、作業効率が向上した。ただし、機器の故障時や携帯ルータの通信不良時などの対応に関しては、依然として不安定要素が多くあるため、職員の作業技術の習熟はもとより、予備機器の配備や機種を選定などの検討が必要である。

P-064

高等学校における献血セミナーの検証と効果について

静岡県赤十字血液センター

小野田千也、大村和久、黒木隆子、矢部 梓、
伊牟田智也、藤浪和彦、南澤孝夫

【はじめに】静岡県東部を管轄する沼津事業所では、高校生を対象とした献血セミナーを大小含め、25年度20回（3,590人）、26年度13回（3,278人）実施した。献血セミナーの効果について、セミナーを実施した高校としなかった高校の生徒を対象に、校内献血後の再献血率に影響があるのか、検証を行ったので報告する。

【方法】平成25年度に校内献血をした静岡県東部の高校で献血セミナーを実施した高校としなかった高校それぞれ4校を抽出し、高校での初めての献血後、2回目以降または学校以外で献血した再献血率を分析する。校内献血で2回以上献血しても1回でカウントし、検証期間を平成27年4月までとした。また、献血セミナーは献血実施前に行い、26年度にセミナーを実施した生徒は卒業して期間がないため対象から外した。

【結果】献血セミナーを実施した高校での再献血率は、17.0%（223人中38人）、実施していない高校での再献血率は9.5%（275人中26人）であった。

【考察】献血セミナーを行った高校の方が、再献血率は高い結果となったことから、献血セミナーは、社会にでてから献血していただく若年層に効果があると思われる。また、献血セミナー実施の効果の表れとして、静岡県東部では、26年度は1校再開し、27年度は2校で献血を再開する予定である。

P-065

若年層献血者確保のための高校献血及び献血セミナーの実施に向けた推進について

福岡県赤十字血液センター

三輪宜伯、池田英里、力丸佳子、小江晴美、
市山公紀、永井正一、平岡三光、高尾征義、
中村博明、竹野良三、佐川公嬌

【はじめに】全国的な少子高齢化社会の中で若年層の献血者確保率を上昇させるため、献血推進に係る中期目標第二期、献血推進2020により2020年度までの数値目標が示された。その中でも10代は7.0パーセントの目標値が定められた。我々は10代の献血者確保に向け、高校献血による積極的な推進を行い、若年層の献血者が減少している中で、この状況を少しでも改善するために、福岡県赤十字血液センター推進課内に専任職員を配置し、献血及び献血セミナーの推進を実施したので報告する。【方法】現在、高校献血においても400mL献血をお願いする必要があることから、教職経験者を若年層献血推進担当職員として配置し、その経験と人脈を活用し、推進担当職員とともに学校へ協力を依頼した。主に学校長や教頭に対して、若年層献血者の献血状況や高校献血の必要性などを説明し、献血及び献血セミナーの実施に取り組んだ。【結果】専任職員を配置した2013年度は、2012年度に比べ献血セミナー実施校が13校から32校へ、19校増加した。また、高校献血も増加し、2013年度は、2012年度に比べ、2,036人から2,607人へと献血者が571人増加した。【考察】今回、専任の若年層献血推進担当者を配置する事により、献血セミナーの実施回数は計画以上の実績をあげることができた。高校献血及び献血セミナーの実施は、若年層献血者確保に不可欠であり、今後も、引き続き本事業は実施する。

P-066

献血セミナーの普及とその広報活動

北海道赤十字血液センター¹⁾、
日本赤十字社北海道ブロック血液センター²⁾
齊藤介男¹⁾、保村 毅¹⁾、山本定光¹⁾、
木下 透¹⁾、山本 哲¹⁾、高本 滋²⁾

【目的】将来の必要献血者数予測によれば、需要が最大値となる2027年には全国で約545万人の協力者が必要となり、献血離れや既献血者の高齢化等で低迷する献血確保数との乖離数は約85万人分不足との推計である。その対策として、献血推進に係る新たな中間目標～2020～にも積極的な活用と推進が打ち出された献血セミナーの普及に取組みを開始したので、初年度からの現状を報告する。【方法】H24年度末に厚生労働省より文部科学省宛てに協力要請がされた〔薬食血発0212第1号〕及び文部科学省の要請受諾に伴う〔事務連絡〕文書等を頼りに管内各保健所の担当部門である医療業務課を訪問、献血セミナー実施に伴う末端監督官庁から推進の確認と証書を得て、各献血推進協議会には市町村教育委員会責任者への橋渡しを要請、そして教育委員会には管内公立学校での広報活動に対する承認および学校現場での校門解錠ほか、責任者へ訪問活動に関する周知と受入れ協力をお願いした。学校現場には、献血セミナーの開催に向けて具体的な資料などを添えた説明と主体的判断が適う児童生徒の育成に資する機会としての開催要請を行った。【結果】函館市内105施設と他市町村133施設を訪問。多くの学校現場からは、大事な事と理解はするが教育委員会指定講座の消化に加えて同類の案内が数多あり、その選択に苦慮していると門を閉ざす中で、初年度である25年は事業課からの紹介を含め9回のセミナーを開催。H26年度は17回の開催ではあったが、重ねての訪問から次年度に繋がる種時を試みたので、今年度目標は、親センターからの継続支援のもと更なる倍増を目指し広報活動を実践している。

P-067

滋賀県最大の大学「立命館大学」における献血者確保

～2つの改革と見えてきた課題～

滋賀県赤十字血液センター

前田淳宏、水野琢磨、治部勇也、水田 温、
杉江琢史、川崎秀二、川島 博、小笹 宏

【はじめに】若年層献血者確保が急務と言われている中、滋賀県は他県と比べても若年層の献血可能人口に対する献血率が低い。その現状を打破すべく、当センターから車で約5分の所にある立命館大学において、2つの改革を行ったので、その効果とそこから見えてきた今後の課題について報告する。【取り組み】(1)平成25年度から献血事務業務とは別に、職員2～3名が1日献血の呼びかけを行った。また、不安を無くし気軽に受け入れてもらう為、紋切り型の呼びかけを止め会話方式での呼びかけを行った。学内生協にも許可を頂き、学食にいる学生にも積極的に声かけを行った。(2)平成24年度より、毎週水曜日に体育会主務会に参加し、10分程度献血セミナーを行った。また、各部主務と積極的にコミュニケーションをとり、友人関係の様な人間関係を形成した。【結果】平成24年度の受付実績に比べ平成25年度受付実績が1稼動平均当たり約7人増えた。(同回数における1稼動平均値) 学生のグループ形成時期である学期初めや、涼しくなってくる秋頃は声かけの反応がとてもよく献血者も増加したが、学期末や寒い時期は学生の反応が悪く献血者も減少した。体育会の実績として平成23年度は54名の献血受付だったが、主務会に参加した平成24年度以降は413名、平成25年度は442名、平成26年度は489名の献血受付があり確実に実績は増えた。【考察】献血の呼びかけ方法を変え、学生とコミュニケーションを図った事により、献血再来者の増加にも繋がったと考えられる。体育会各部の主務に献血担当になって頂く事で、各部からの協力者が大幅に増加した。また、主務と良い関係を築くことで献血バスに気軽に立ち寄ってくれる様になり、献血バス全体の雰囲気が良くなった。それが更なる献血者確保につながったと考えられる。今後は、協力者減少時期に体育会に献血の協力を依頼するなどの日程調整や、年間稼動数の調節が課題となってくるだろう。

P-068

ワークショップ形式を利用した献血推進についてー献血への誘導と課題解決策の提案を受けるための取り組みー

滋賀県赤十字血液センター

横内 光、西川健治、島田裕雄、川崎秀二、
小笹 宏

【目的】滋賀県が実施する就職支援・人材育成研修に参加する求職者49名を対象に、この研修プログラムの一環として行われたワークショップ（以下WSとする）を献血の啓発に利用した。約3ヶ月間にわたり実施されたこの研修は主に20代が参加し、修了後約8割が県内企業へ就職するものである。今回WSの「学習・教育」および「問題解決」の手法としての特長を利用し、受講者に対し献血に関する知識付けと実際の献血への誘導、加えて当社課題について意見提案を受けることを目的とした。【方法】まず、受講者に対し血液事業の歴史・現状および課題提示のプレゼンテーションを実施した。課題としては、「2027年問題」の解決策を求めるとし、議論のポイントとして「献血意欲の向上」と「若年層の献血推進」を提示した。次に受講者は小グループに分かれ、WS形式で提示された課題に対する解決策を考案し、2週間の期間を以て発表させた。【結果】受講者49名中、19名の献血協力を得ることができた。なお、献血者19名のうち約9割の17名は解決策を考案する段階での協力であった。また、各7名で構成される7グループの意見提案（各10分程度）を受けた。その中で、広報強化策が必要との意見が多数を占め、手段としてはスマートフォン向けアプリケーションやSNSの活用、参加型教育などが挙げられた。【考察】上記の結果から、WS受講者の目的である課題解決が、自主的な情報収集および実際の献血に結びついたと推測できる。2点目の目的であった意見提案については、実現性に問題はあるがアイデアや視点として参考にできる内容が多かった。今後、時間的負担は増加するが、コンテスト形式で企画を実用化するという展開も考えられる。この取り組みの継続が、献血者の長期的な確保の一策として機能することが期待される。

P-069

若者が集まるイベントから始まる初回献血者の獲得と方策について

東京都赤十字血液センター

宮永麻由、笠原俊幸、国吉紀和、古井美史、
乙訓高一、廣木哲也、加藤恒生

【はじめに】 少子化、超高齢社会を迎え、安定的な輸血用血液の確保は喫緊の課題である。この課題に取り組むべく、当センターにおいては、献血者のターゲットを漫画、アニメの愛好家に絞り、若年層初回献血者の開拓を目的にイベント会場での献血実施の際に行った工夫について報告する。【方法】 例年8月と12月に東京ビッグサイトで開催されるコミックマーケットという漫画、アニメに特化したイベントにおいて、当センターでは毎年12月開催時に献血を実施している。若者を中心に3日間で約55万人の来場者がいる。本イベントにおいて平成23年より、イベント出店企業の協力により400mL献血協力者にアニメと赤十字のコラボ限定ポスターを提供し、若年層初回献血者の確保強化を図るべく取り組んできた。平成26年度で4回目を迎えた本イベントと当センター全体の年間若年層初回献血者率を比較した。なお、8月に関しては会場が非常に高温多湿となるため献血者の安全性を考慮し、献血実施はしていない。【結果】 平成25年度の実績と照合してみた。10代・20代総献血者実績を比べてみると、当センターの初回者は21.3%であったことに対し、本イベントの献血会場では37.5%、開始から4年間の平均は41.7%であり、特に10代は66.7%となった。このことから本イベントは若年層が献血を始めるきっかけとなり、若年層初回献血者の開拓に多大な効果があったことがわかる。また、ポスター配布対象者を400mL献血協力者に限定したことも寄与し、ポスター配布開始後は平均98%もの400mL献血率を維持することができている。今後も当センターとポスター配布を提案してくださった企業側とが連携し、より多くの若年層初回献血者を引き寄せることができるツールを考案していくとともに、その方たちがその後継続して献血への協力を行っているかについても調査していき、将来的な血液の安定確保につながる役割を果たしているかについても検証していきたい。

P-070

受血者の活躍と感謝を献血者に
～ダウン症のタレントあべけん太氏を通して～

東京都赤十字血液センター

岩井菜緒子、加藤恒生、廣木哲也、塩見 晃

【目的】 当ルームには平日平均169人、週末241人の方が献血に訪れる。（平成26年度平均）献血者の皆さんは何かしら役に立てばと善意で協力して下さるが、献血した血液がどのような人に役立っているか、実感して頂く機会が少ないのが現状である。受血者が、輸血を受けた後どのような活躍をしているかを献血者に知ってもらう事を目的とする。【方法・工夫点】 昨年、当ルームでは、冬季感謝祭として「3つのおもてなし」を行い、その中の一環として、12月1日～31日まで、ダウン症の方の描いた絵画を展示した。ダウン症の方は、心臓病を併発して生まれてくる方が多く、そのため手術で輸血を受ける方がいる。献血後の血液がどのように使われているのかの一例を紹介するために、幼い頃に輸血を受け、現在タレントとしてTVなどに出演し、自作の絵画で個展を開くなど、様々な活躍をしているあべけん太氏に協力を頂いた。工夫点として一つ目が、献血ルームの入り口にあべ氏が描いた絵画の展示をした。二つ目は、作者であるあべ氏の紹介パネルの設置をし、三つ目は献血後、カードを返す際にアンケートをお配りし、献血者の反応を調査した。【結果】 アンケートは、426件集まった。アンケート項目の一つである、「ダウン症の方の中に輸血を受けている人がいることを知っていたか」という質問に対して、「いいえ」が95%であった。絵画についての自由記述には、「具体的にどのように血液が使われているか分かってよかったです」、等前向きなコメントも多数寄せられた。【考察と展望】 日々のメールやハガキなどでの広報活動はもちろんだが、献血者には空間的、心身的な満足度を高めることは、献血ルーム職員にとって大きな課題である。心身的な満足として、献血者自身に、「献血への想い」を持って頂くような企画をし、日々献血者へアプローチしていきたい。様々な理由で輸血を受けた方の今の姿を示していくことは必要不可欠である。

P-071

ロータリークラブによる「お誘い献血キャンペーン」について

大阪府赤十字血液センター

清山幸彦、神前昌敏、白髭 修、安原武志、
森本 実、池田 超

【現状】平成26年度における当血液センターの全血確保状況は、移動採血車54.3%、献血ルーム45.7%であるが、近年、移動採血車においては、駐車スペースや企業の移転及び業務の縮小により職域献血が減少している。更にビル献血においても、ビルのセキュリティ上、渉外・広報活動にかかる制限があることから減少傾向にある。そこで、新たな全血確保対策として、ロータリークラブの協力を得て大阪府内の献血ルームへの動員に努めた。

【方法】ロータリークラブ（国際ロータリー第2660地区7組）10クラブ会員500名を対象に「お誘い献血キャンペーン」を計画した。事前に各クラブの例会に出席し献血状況を訴え、血液センターが作成した「お誘いカード」を各メンバーが2枚づつ家族や知り合いの方に配布し、一定期間内（3/22～4/12の約1か月）に最寄りの献血ルームで協力いただくことをお願いした。

【結果】期間中に「お誘いカード」を持参いただいた方は、8クラブ125名余りであったが、採血計画には含まない取組みであったため、年度末年度初においては大きな乗せとなった。また、近隣センターでの参加もあり、一定の理解と協力は得られた。

【考察】今後は、カードの配布時期に余裕を持ち、さらに、PR方法を工夫する等して血液不足時期に定例化することによって安定した協力を得ることができると考える。また、このたびは、ロータリークラブの広域的な取り組みとして実施したが、今後は、ライオンズクラブや献血バスを配車できない企業、さらに献血ルーム周辺の学校等に対する取り組みとして実施することによって、新たな献血者確保対策として広げていきたい。

P-072

地元Jリーグチームとの連携による献血応援スペシャルマッチ ー10年目を迎えてー

群馬県赤十字血液センター

石島一恵、長井英行、高橋健太、須田 聖、
田村伸雄、渡辺 進、庄山 隆、林 泰秀

【はじめに】群馬県赤十字血液センターでは、県内のプロサッカーチーム、J2「ザスパクサツ群馬」に献血推進の協力を得てから今年で10年目となる。この間の取り組みや献血への効果について報告する。

【方法】ホームゲームでの冠マッチ（献血応援スペシャルマッチ）を開催した。試合会場に献血バスを配車し、試合前やハーフタイムに献血推進イベントを行い、当日の献血や後日における献血ルームへの誘導を促すイベントも実施した。また選手による献血推進ポスター及び献血推進メッセージも作製した。選手からの献血推進メッセージは、ポスターQRコードからの読み取りやザスパクサツ群馬ホームページより視聴可能とした。また、メッセージの映像をCM加工し、スタジアムの大型ビジョンで放映した。

【結果】この10年間での冠マッチ時の献血バスの配車は9台、献血者数522名（平均58名）の協力を得ている。ここでの献血実施は毎年恒例となりサポーターをはじめとした協力者もリピーターが多く、今年は、献血者数68名で400mL率も91%であった。また試合来場者に対し、献血ルームへの誘導カードを配布したことにより、試合後や後日にも献血に協力をいただけた。平成27年4月冠マッチでアンケートを実施したところ（場内観客274名回答）、献血応援スペシャルマッチについて、ザスパクサツ群馬のホームページで知った方は74.4%、献血推進ポスターに選手が出演している認知度は81.7%と高い割合を占め、また92.6%が献血するきっかけとなるという結果であった。

【考察】スポーツチームとの連携によって、マスコミからの発信も多くなり、またチームを通じて新規団体とも繋がりがもて、新たな献血者確保もできている。今後もチームと協力して更なる献血推進活動をしていく予定である。

P-073

地元プロスポーツチームとの献血推進活動の
取り組みについて

岐阜県赤十字血液センター

森下博代、野村雅之、佐伯俊也、香田昌宏、
小池則弘、林 勝知

【目的】 地元プロスポーツチームと連携し、地域に根差した広報展開や、若年層をはじめとする幅広い層に対する献血推進を図る。【方法】 Jリーグに加盟しているプロサッカーチーム「FC岐阜」と、平成22年度からスタジアム内の献血推進広告を掲出することにより連携を開始した。同時に、選手を起用した献血推進ポスターを作成し、県内各少年サッカークラブや、FC岐阜サポート企業、団体等に掲示いただいた。平成25年度からは、ポスターの内100枚に選手の直筆サインを記入いただき、献血キャンペーン記念品として使用した。また、固定施設にて、U-18選手の団体献血協力をいただいた。特に平成26年度に初めて行ったスタジアム献血では、FC岐阜が選手による献血推進CMを作成し、試合会場のオーロラビジョンでサポーターに対し放映いただいた。その他にも、けんけつちゃん着ぐるみによるサポーター入退場時のグリーティング、ハーフタイム時のパフォーマンスを行った。【結果】 献血推進ポスターは、血液センターでは普段広報していない企業や団体等に掲示いただいたことで広く周知することができ、直筆サイン入りポスタープレゼントキャンペーンでは、1ヶ月で100人のポスター希望での献血協力を得た。また、U-18選手の献血協力においては、マスコミの取材を受け、テレビ放映、新聞掲載されたことにより、若年層献血広報の一助となった。スタジアム献血では、試合が18:00キックオフであったため、受付時間を13:00～17:30に設定し、400mL献血で67名、134単位の協力を得た。（平成26年度の岐阜県の移動採血車一稼働当たりの単位数は74.9単位）【考察】 今後ますます地域に定着していくと思われる地元プロスポーツチームとの連携を強化し、県内各地域や、小学生以上の幅広い年齢層に広報できることは、今後の献血者の増加の一助となるものと思料される。

P-074

若年層献血者を対象とした次回献血に繋がる
フォローアップについて

兵庫県赤十字血液センター

毛藤もと子、樋上優理子、大橋淳司、
古好健二、長谷川正行、福井孝之、布一 正、
三木 均

【目的】

若年層（10、20代）の初回献血者に対して、血液の使用状況、患者家族の声等の情報を配信することにより、次回献血協力や複数回献血登録に繋げる。

【方法】

平成25年度近畿ブロック地域活性化計画に基づき、若年層の初回献血者に対する次回献血に繋がるフォローアップ事業として実施。対象者にポストカード及び文書を発送する。

《ポストカード》献血日から約1週間後、対象者全てにポストカードを発送する。内容は次回協力を依頼するものではなく、いただいた血液を実際に患者さんにお届けできたことの報告とお礼に重きをおいた。また、親しみやすく手元に置いていただけるものであること、献血キャラクターの周知を兼ね、デザインにはけんけつちゃんを起用。次回献血啓発の一助となることを考えた。

《依頼文書》発送日を女性400mLご協力者の献血可能日である16週間後以降と設定し、400mL献血、成分献血協力者に依頼はがきに代わる文書を送付する。現状をお知らせするチラシの他、輸血用血液の行方及び複数回献血クラブ情報を同封する。

いずれの資材も献血依頼を前面に押し出すものではなく、献血された方に“自分が支えた命があった”ということを実感していただく内容とした。また、内容をご理解いただくためには、まず送付物を「見ていただく」ことが重要なことと捉え、漫画による解説や輸血の歴史にトリビア的な内容を盛り込むなど、紙面の改変を重ねている。

【結果】

平成26年5月から8月に献血された依頼文書送付対象者1,384名、応諾者262名、応諾率18.9%

【考察】

初回献血者の早い時期での献血協力は以降の複数回協力を影響することから、この取組については今後も改善しながら継続していきたい。

P-075

若手職員発案 学生と献血啓発「けんけつちゃんカフェ」

静岡県赤十字血液センター¹⁾、
日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター²⁾

島津亜衣¹⁾、源間健太郎¹⁾、千澤 護²⁾、
島居愛美¹⁾、曾根 渉¹⁾、大田里美¹⁾、
矢部 梓¹⁾、中野有華¹⁾、加藤和彦¹⁾、
鈴木幸男¹⁾、森竹龍彦¹⁾、藤浪和彦¹⁾、南澤孝夫¹⁾

【はじめに】若者の献血離れが問題視される中、若年層献血者確保のため20代の若手職員で発足した「1629プロジェクト」。「今までにやったことのない」ことへの挑戦として、若年層をターゲットにしたイベントを企画・実施したので報告する。

【方法】学生の勧誘を行いやすい夏休み期間にイベントを実施。「献血＝怖い」というイメージの払拭、「足を踏み入れやすい環境づくり」を課題とし、気軽に立ち寄れるカフェ風雰囲気づくりや菓子でおもてなしすることを考案。毎回100名以上の献血協力がある地元の調理製菓専門学校にけんけつちゃんのアイスリング入りクッキーの製作を依頼。献血会場にカフェ風のスペースを設けることで、通行人の目を引き、立ち寄りやすい雰囲気をつくる。ルームを含め会場にけんけつちゃんの着ぐるみを登場させ、子どもや献血になじみのない方にも興味をもってもらいやすいように演出。イベント当日は大学生・高校生のボランティアが街頭で呼びかけやティッシュ配り、カフェスペースでの対応を行った。

【結果】イベントを実施した移動採血バス・固定施設、全7会場で予定数を上回り、献血者数が平均約2割増。若年層献血者については2割増を目標にし、3会場で達成。献血者の4割を若年層が占める会場もあった。若年層献血の啓発として、会場をアレンジし、学生とコラボするという事で、新聞2社が記事を掲載。

【考察】会場演出により、献血への一歩を踏み出すことができたという初回献血者や、普段と違って明るくかわい雰囲気がいよという複数回献血者からの声が多く、普段と一味違う特別感が好評であった。菓子製作を依頼した学校からの提案で「アイスリング体験教室」も実施。先生方から、学んでいることを活かした献血啓発活動、外部から発注を受け期日内に納品するという経験を学生につませることができた、今後も協力的な姿勢を示してくれた。これからも若者が直接関われる企画を考えたい。

P-076

若年層献血者確保の取り組み（第3報）『献血×学食』 献血を知って、献血に行こう！

京都府赤十字血液センター

関 善崇、渡邊琢仁、野口友理子、中鋪成美、
宮本雄太、青野正英、山本真希子、澤村 大、
木本昌史、初井一也、大橋一雄、山口健彦、
伊藤俊之、辻 肇

【はじめに】京都センターでは、若年層献血者確保に向けて、大学内での「学食と献血のコラボ」による広報展開を第37回・第38回総会にて報告した。献血推進に係る新たな中期目標『献血推進2020』で若年層の献血者確保が急務に挙げられるなか「学生が興味を示し」「学生が集まり」「話題になり」「注目を集める」ことのできる学生食堂は大学内での広報活動場所に最適である。本コラボは学生・食堂双方から好評を得ており、今後、実施校数の増加を目指し拡大継続することになった。【方法】今年度は新たに5大学（京都大学・京都橘大学・京都教育大学・京都工芸繊維大学・龍谷大学）を加えることで、計7大学への拡大を予定している。各学食で提供するメニューは、鉄分豊富な4品を選定し週替わりで1か月間提供する。メニューの告知は食堂入口のタペストリーとブライスカードにて行う。献血広報は、ポスターや各テーブルに設置した卓上POPに、若年層献血者の減少や2027年問題等、献血の現状を重点に掲載することにし、若年層の献血意識高揚を図ることとした。POPに記載されたコードを読み取り、ダウンロードしたクーポンを提示いただくことにより記念品を進呈をする。【考察】昨年度は、学食と献血のコラボを実施していることを告知することに偏ってしまい、その結果、他のイベントとの違いをアピールできず、埋もれてしまった。今年度は、「食事をして終わり」ではなく、そこから行動を促す手段に加え、センターと生協とだけで完結するのではなく、学生を巻き込んでいくにはどうすればいいかも併せて検討した。また、昨年までのチームは献血推進部門のみで構成されていたが、今年度からは採血部門職員も加わり、より広い観点から若年層献血者確保の方策を展開していくこととした。

P-077

佐賀大学附属病院後期臨床研修医による検診業務支援体制の確立について

佐賀県赤十字血液センター

山本恵子、松本光子、増田善久、江口嘉則、
溝上博之、吉村博之、入田和男

【はじめに】当センターでは検診医師の慢性的な不足状況が恒常化しており、安定的な医師確保は喫緊の課題であった。この度、佐賀大学附属病院の協力により後期臨床研修医を定期的に派遣して頂く体制が確立できたので、その概要を報告する。【方法】平成26年6月当センター所長並びに事業部長が、佐賀大学病院長はじめ病院幹部と面談した。検診医師の現状を説明し、検診業務支援を依頼した。当初は医師の多忙や手当の問題があり、難色を示された。しかし、県下最大の血液製剤使用医療機関として社会貢献すべきとの病院長の英断により、後期臨床研修医の派遣が実現した。派遣体制の構築にあたり、当センター、大学、双方の総務課が窓口となり以下について詳細を打合せた。1) 各部門（血液センター、大学総務課、医局、派遣医師）の役割分担 2) 派遣計画の策定方法 3) 医師の出勤日確認方法 4) 医師の教育訓練の実施方法 5) 検診当日の詳細 【結果】平成26年11月より毎週1名、医師派遣の協力が得られた。各部門の連携により、医師の欠勤等の問題も発生せず、検診医師の不足解消につながった。教育訓練は、医師の大半が初期臨床研修で血液センターでの研修を受講済みのため、事前に検診業務の簡単な資料を送付し、当日のオリエンテーションで補完する形式をとった。【考察】医師に献血の現場を経験してもらうことは、血液製剤は献血者の善意による有限かつ貴重な公共資源であることを実感し、血液を使用する側として、輸血用血液の適正使用の動機づけにつながると考える。また、大学からの定期的な医師の派遣は、検診医師の継続的な確保につながると同時に、大学病院と多面的な信頼関係構築の上でも有意義と考える。今後は、事務手続きの簡素化や医師への効果的な教育訓練の方法を検討したい。

P-078

研修医および医学生への血液事業の啓発活動～献血現場から～

福岡県赤十字血液センター¹⁾、
日本赤十字社九州ブロック血液センター²⁾、
福岡大学病院輸血部³⁾、
聖マリア病院輸血科⁴⁾岩崎潤子¹⁾、井上純子²⁾、波多江英明¹⁾、
田中由利子¹⁾、熊川みどり³⁾、鷹野壽代⁴⁾、
中村博明¹⁾、竹野良三¹⁾、清川博之²⁾、佐川公矯¹⁾

【目的】輸血療法は、医療機関で日常的に行われているが、臨床医が血液製剤の安全性・供給体制について改めて考えることは少ない。今回、1) 初期研修中の医師には、医務課の医師として、検診業務に従事するための教育訓練、2) 医学生および研修医に対しては、見学実習のカリキュラム整備、に取り組んだので報告する。【方法】教育訓練は、医務課長が事前に所属の医療機関で講義を行い、初回の検診医業務時に実施指導した。検診医業務終了後に、自己評価・アンケートを行った。見学実習カリキュラムは、医療機関の輸血部門の希望を聴取し、ブロックセンターの各部門と調整を行いながら作成した。【結果】2つの医療施設から派遣される検診医に対して、教育訓練を実施した。事前の講義は1施設でのみ実施した。献血現場では初回に1時間程度検診業務の説明を行い、需給バランス、採血副作用、血液製剤の安全対策等の説明を行った。業務終了時の評価では、「適正使用の自覚が高まった」「採血副作用の対策が必要だと分かった」等の意見があった。一方、短時間で検診業務手順と血液事業概要を説明するのに苦労した。医学生実習では固定施設見学後、「献血者確保の苦労が分かった。自分も献血したい。若年者の献血率アップに貢献したい。」との声が聞かれた。研修医の見学実習では、当該医療機関の輸血部医師と固定施設見学を計画したが、時間的な制約により実施出来ず、ブロックセンターでの検査・製造業務の見学実習の際に採血現場の様子を動画で紹介した。【考察】研修医、医学生ともに、検診業務・見学実習を肯定的に受け止めていたが、医療機関側は派遣の時間を割くことが難しく、血液センター側では、検診業務の教育訓練が複雑であること、研修担当者の確保が難しい等の課題もある。今後は、効率的・効果的な研修のための資料を充実させるとともに、医療機関の輸血部門・臨床研修管理委員会等に積極的に働きかけていきたい。

P-079

『Yahoo! 路線情報』 バナー広告を活用した献血ルーム案内及びホームページへの誘導の効果検証

神奈川県赤十字血液センター

石黒千尋、鈴木みづき、田中由紀子、
橘川和彦、千葉泰之、佐藤 研、永島 實

【目的】 当センターでは、従来からホームページ（以下「HP」）を献血者確保につなげるための広報手段として活用してきたが、過去のデータから HP 訪問数と献血者数にある程度の相関関係がみられることが分かった（相関係数 $r=0.780$ 、危険率 $p < 0.01$ ）。そこで、インターネットの主要な利用目的の一つである交通情報の検索に着目し、HP へ誘導する手段として路線検索サイトのバナー広告を活用した広報を実施し、効果を検証した。【方法】 生活環境の変化により電車路線情報のネット検索が集中しやすい4月に、『Yahoo! 路線情報』に1か月間広告掲載をした。これは指定の到着駅を検索すると、検索結果と同画面に大サイズのパナー広告（600 × 300 ピクセル）が1社独占で表示される広告媒体である。今回は、全国有数の乗降客数を誇り、ルームが3か所ある「横浜駅」を対象を絞ってルーム案内の広告を掲載した。パナーのリンク先を血液センター HP に設定し、横浜駅着で検索をした利用者が広告をクリックすると HP へアクセスするようにした。【結果】 パナー広告は1か月間で776,023回表示され、1,641回クリックされた。コスト換算すると、その表示単価は新聞折込チラシなど他の広告媒体に比べて格安の0.52円であった。また、1か月間のHPセッション数（サイト訪問数）は昨年度同月と比べて4,269回（24.5%）増加しており、そのうち約40%はパナー広告からの誘導によるものであった。【考察】 パナー広告は、掲出時期と掲出先を絞ることで、効率よく閲覧者（ターゲット）の目に触れやすくすることができ、また、クリックのみでHPにアクセスできる利便性と、数値で効果測定ができるという利点がある。パナー広告を閲覧者の関心を喚起するよう効果的に活用し、広告からHPへ誘導することで、リンク先の有益な情報の提供につなげることが可能である。これは、HP訪問数と献血者数の相関関係からも明かなように、今回の広報は献血者増進に有効な手段であると考えられる。

P-080

Google インディアビューを用いた献血ルームの広報展開について

静岡県赤十字血液センター¹⁾、
日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター²⁾
齋藤慶太¹⁾、皆木暢之²⁾、谷川昌平¹⁾、
望月尚登¹⁾、南澤孝夫¹⁾

【結論】

固定施設の広報展開として Google インディアビューを活用し、受付や採血室のWEB内覧をしてもらうことで、献血未経験の方の不安の軽減、さらには若年層の献血啓発につながるのではないかと考えられる。

【目的】

平成23年に厚生労働省が行った『若年層献血意識調査』によると10代、20代の献血未経験者の約2割が「なんとなく不安」、「わからない」といった理由から献血をしていないということが判明した。若者の献血に対する漠然とした不安のひとつを軽減させるため、平成27年4月より県内4つの施設（献血ルーム3ヶ所、母体1ヶ所）で Google インディアビューを導入。誰にでも献血ルームの内部の様子が見られるようにし、導入を周知するための広報展開を行った。

【方法】

インディアビューの導入については広告代理店を通して Google 認定の業者に依頼した。費用は1ヶ所8万円で、業務開始前と終了後に撮影を行った。撮影時間は1ヶ所あたり2時間程度で完成までには1ヶ月ほどかかった。広報手段としては現在、ホームページへの掲載や献血ルーム紹介用のパンフレット・ポスターへのQRコードの掲載、Twitterによる情報提供を行っている。

【課題】

現在の広報手段ですでに献血にご協力いただいている方が対象となってしまっている点が課題であるため、的確に献血未経験者、若年層献血者の目に入るような新たな広報手段を考える必要がある。4月の導入から日が浅いため、まだ十分な広報展開ができていないのが現状ではあるが、近くに行かなければ分からなかった献血現場の様子が離れたところからでも見ることができ、一度撮影したものは施設が移設するまでは使用できるということは大きな利点である。今後は献血啓発の新たなツールとして、長期的な視点での活用を考えていきたい。

P-081

献血者向け広報紙における献血協力団体紹介記事の刷新について

千葉県赤十字血液センター

新田菜摘、古山貴浩、田中邦明、細井俊彦、
井原隆博、小松広美、小泉雅由、浅井隆善

【はじめに】当センターでは、献血者向け広報紙「ドナー通信」における献血協力団体紹介コーナーの刷新を図り、一定の効果が見られたので紹介する。【経緯】従来の献血協力団体紹介記事は、原稿が集まりにくく苦慮していたが、この原因として、原稿の作成依頼が負担となっていると考えられた。そこで、原稿を依頼せずに、血液センターが取材に赴いて記事を作成する方法で、コーナーの刷新に取り組んだ。【方法】従来は、コーナー名を「献血協力企業・団体紹介」とし、原稿の作成を献血協力団体に依頼して、その原稿を掲載することにより団体の献血への取組等を紹介していた。平成25年9月号から新しい取組を始め、コーナー名を「けんけつちゃんが行く！献血協力企業・団体訪問」とした。けんけつちゃんが実際に献血協力団体を訪問して、活動内容等を楽しく紹介する記事を目指し、その団体ならではの風景にけんけつちゃんも参加した写真を撮影して掲載するとともに、その団体の献血との関わりやエピソード等を取材して紹介した。【結果】刷新コーナーの掲載以降、このコーナーに対して読者からの好評のハガキが届くようになった（新コーナー掲載後21カ月間で34通／旧コーナーでの18カ月分では1通）。現在まで8件の取材をしているが、何れの場合も、各献血協力団体が推薦する撮影対象を用意していただく、あるいは、その団体の特徴的な撮影シーンの提案をいただくなど、積極的なご協力をいただいた。また、取材先団体施設での「ドナー通信」（掲載号）の掲示・配布協力をいただいた他、取材先団体の広報媒体等で取材の様子が紹介されるなどの効果も得られた。さらに、新たな献血協力団体からの取材の申し入れもいただいている。【考察】献血協力団体紹介コーナーの刷新が、献血協力団体の広報ニーズに合致したと思われ、今後の良好な協力関係づくりに寄与できるものと思われる。

P-082

献血推進のための広報活動の有効性を検証する

福岡県赤十字血液センター

吉田文洋、大箇 健、藤本孝一、松田敦志、
中村博明、石川博徳、佐川公矯

【目的】福岡県赤十字血液センターが実施している献血推進のための広報活動について、その有効性を検証する。【方法】福岡県内の移動採血ならびに献血ルーム5ヶ所において2015年1月26日から2月24日までの間、今回初めて献血に協力いただける献血者へ「初回献血アンケート調査票」を配布し回答をお願いした。調査項目は、1) 性別、2) 年齢、3) 献血のきっかけ（複数回答可）、4) 血液センターが行なっている広報活動について知っているもの（複数回答可）の4項目について選択式での回答を依頼した。【結果】1126人からの回答をいただいた。施設別は移動採血会場666人で59.2%となり全体の6割を占めた。1) 男性61%、女性39% 2) 年代別では10代49.3%、20代34.2%、30代9.9%、40代4.9%、50代1.5%、60代0.2%であった。10代・20代の回答が多かったのは、高校・大学等の学域に移動採血バスを計22台配車したことが一因である。3) 献血のきっかけは、「だれかの役にたたい」が503人、27.8%、次に「家族・友人に誘われた」が384人、21.2%で全体の半数を占めた。4) 血液センターが行なっている広報活動について知っているものについては、「テレビ・ラジオによる広報活動」が539人、29.0%、次に「ポスター」が431人、23.2%であった。また、「看板・駅等の掲示板・懸垂幕」が406人、21.9%であり、以上3つで全体の7割を占めた。【考察】広報活動としては、従前よりおこなってきたテレビ放映・ラジオ放送、ポスター掲示、看板等設置が効果的であることが確認された。一方、認知度の低い広報手段も判明した。これらの結果を踏まえて、今後、広報活動の予算配分に生かしたい。また、広報活動については、その有効性を絶えず検証する必要がある。初回献血者の献血のきっかけとして、だれかの役に立ちたいと社会貢献に意欲的な回答が約3割を占めたが、今後もこの意識を継続して持っていただくために、効果的な広報を展開しなければならない。

P-083

マスコミを活用した血液緊急確保対策について

大阪府赤十字血液センター

大石多加夫、神前昌敏、白髭 修、安原武志、
辻 亨、森本 実、池田 超、篠原勇司、
藤田明子

【状況】 例年、年明けから1月中頃にかけては血液が不足する時期であり、当血液センターでは、これに対応した確保対策を講じていたところであるが、今年は、年末年始に臓器移植等大量に血液を使用する疾患が続き、大阪府内のみならず近畿ブロック管内における血液在庫が激減した。【対策】 当血液センターでは、この血液不足解消に向け、以下の緊急確保対策を講じた。移動採血車の増班や献血ルームの時間延長及び4施設での20時までのナイター献血、更にメール及びDMの追加依頼要請に加えて、このたびの緊急確保対策と血液不足の現状を広く告知するため1/6から1/14にかけて各放送局等へ情報配信を行った。結果、NHK大阪放送局の他、テレビ局1局、ラジオ局7局、新聞社1社から応諾を得た。特に、各課からの呼びかけ応援等総勢75名以上の動員をかけた献血ルーム4施設でのナイター献血の実施は、NHKで大きく取り上げられた。【結果】 1/7時点において、採血実績は対計画比率91.8%、一方、供給実績は対計画比率113.3%であり、20ポイントを超える乖離があったが、報道後、血液不足を知ったという献血者が各献血会場に連日多数来所し、短期間で大幅に増加した。また、その後、NHKの取材は、奈良、和歌山に広がり、更には関東甲信越ブロック血液センターや横浜の献血ルームへの取材に繋がり、全国放送へと展開した。1月末日には、採血実績は対計画比率102.5%、供給実績は対計画比率102.4%となり、需要に対して十分な献血者が確保でき安定在庫にまで回復した。【考察】 このたびのような危機的な事態に陥った際には、インパクトのある対策をとることがマスコミに対しては有効であると考えられる。また、今回、マスコミの影響を痛感したことから、広報担当者として、必要時に取り上げていただけるよう日頃から報道機関との繋がりを重んじ、さらに情報の配信方法、内容についてもレベルアップしていきたい。

P-084

献血ルームにおける献血者増に向けた多様な取り組みについて

福岡県赤十字血液センター

川原真吾、吉原由香、服部美也、平石博隆、
宝蔵寺重信、高田 勉、藤木孝一、中村博明、
竹野良三、佐川公嬌

【はじめに】

福岡センター管内（福岡市内）には3つの献血ルームが設置されているが、近年、献血者数は減少傾向にある。増加対策として、はがき・メール・電話等で依頼を行っているが、2014年より献血ルームにおいて事業所等への渉外活動を行い、これらに加えさらに献血者確保の推進のため献血者の送迎を実施する等の新しい取り組みを始めたので報告する。

【方法】

当センターの方針である「献血者及び職員を育み安定供給を行う」ことを念頭に置き、複数回献血者の増加対策（登録者の増加、接遇時のコミュニケーション等）について職員の情報共有及び意志統一を充実させた。

さらに、当センターにおいては献血ルーム活性化委員会を2015年度に設置し、献血ルーム間でのさらなる情報共有を図っている。

渉外活動については、献血ルームの推進担当者間で献血団体等の推進の進捗状況及び実績等の情報共有を図った。

送迎については、対象事業所を増加させ、血小板成分献血や400mL献血の不足に対して迅速に確保できる体制を整えた。

依頼要請については、2015年2月に発足した九州地区地域密着型広報戦略委員会と連携し、献血情報に加えて医療機関での輸血の使用状況などの情報提供を行うことで、献血者に対してより献血への理解を頂ける活動を行っている。

【結果】

従来の取り組みに加えて、献血ルーム活性化委員会を実施するとともに、分割血小板が確保できる献血者を積極的に確保したことで、血液の需要に応じた献血者確保をすることができた。

【考察】

今後、医療機関のニーズに応じた献血者を確保するためには、新規献血者に加え再来者を増やすことが必要である。また、従来は献血ルームでは成分献血中心の採血を行っていたが、今後400mL献血の型別の需要に応じた確保を行う必要があり、多様な献血者確保対策が必要である。

P-085

400mL 献血専用ルームにおける取り組み

兵庫県赤十字血液センター

佐野仁美、畑美登利、戸口あゆ美、田邊佳子、
西本裕一、竹内仁美、中村美幸、津村直子、
関 育子、島袋和美、荒井美子、岡久美子、
鶴目吉成、吉村由美、村木明文、平川通夫、
福井孝之、三木 均

経緯：当献血ルームは兵庫県下で最も賑やかな三宮センター街の商業施設であるセンタープラザ西館3階に位置している。当ルームの前身である「三宮さんプラザ献血ルーム」は昭和59年に開所、平成19年1月にミント神戸へ全面移転したが、同年12月に元の施設の一部を再利用して業務を再開し平成22年10月からベッド6床の400mL 献血専用ルームとなった。翌年23年度をピークに献血者が減少傾向にある。

特色：商店街には【献血ルームのある街 ～三宮センター街～】と大きく記した横断幕、全館に響き渡る献血依頼の館内放送、年4回の三宮センター街献血推進デーには近隣店舗の店主、スタッフの皆様の献血呼び掛け活動や献血参加と街ぐるみで献血推進運動をご支援いただいている。また、若年層と初回者が多く、平成25年度の若年層率は全体の32.7% 初回率は9.1%であった。近隣には多くのホビーショップが立ち並び、コミケ×献血応援キャンペーンの折にはアニメやゲームファンの献血者で大変な賑わいとなった。

取組み：26年度の下半期対策として、土日の呼び掛けスタッフを1名増員した。400mL 献血のリピーター造りのため若年層には献血お約束カード、それ以外の方には次回お願いカードを夏期から配布した。更にコミケポスターやけんけつちゃんグッズを活用したキャンペーンを実施したことで対前年下半期より659名（108.6%）の増加を図れた。

今後の対策：過去4年間の女性不採血のうち血色素不足が占める割合が平均67%と高かったため、手造りリーフレット「献血にご協力いただけなかった方へ」を活用し、次回献血が可能となるためのフォローアップに繋げていく。また、若年層や初回者を確保するため新たな方策を検討し、400mL 献血専用ルームという高いハードルを克服していきたい。

P-086

カフェスタイルによる献血者サービス

東京都赤十字血液センター

高橋李沙、加藤恒生、廣木哲也、河替秀成、
日沼 繁、真名子良幸、中村敬子、
森本ルイ子、寺田保乃佳

【背景】 feel は、東京スカイツリーの隣にあり情報発信機能を併せ持った新しい献血ルームとして誕生した。その特徴として facebook の導入、人との繋がりを大切にしたクロークの設置、日本で初めて喫茶店営業許可を取得したカフェスペースを設けている。カフェといえば現在、若者を中心に今や癒しやくつろぎの空間になっている。feel では若者文化に定着したものを取り入れつつ、献血者とのコミュニケーション・おもてなしを重視している。そこで、カフェスタイルによる献血者サービスを模索し、その効果を報告する。**【方法】** 季節やイベントに合わせて限定ドリンクを提供し、ドリンクに添えるナプキンには職員による自筆感謝メッセージやイラストを描くほか、誕生日や献血100回目といった記念日にはお祝いメッセージをドリンクとともに贈り「おもてなし」の気持ちを大切にした。**【結果】** facebook での「いいね！」数は開所当初の80から現在1850と増加した。また、facebook でのページレビューは140件を超え、feel に対する評価は5つ星評価のうち4.5と高い結果となった。**【考察】** この結果から献血者が喜ぶ居心地の良い空間や温かいおもてなし作りができた。また、ひとりひとりドリンクやお菓子を提供することにより適正な予算管理が可能となった。さらに facebook では一方的な情報発信のみではなく、献血者が実際に受け取ったドリンクとナプキンの写真を自発的に投稿することもしばしばあり、実際の来所者からの口コミ効果により、普段献血ルームに足を運ばない、献血経験の無い層に対しても効果的に情報発信ができた。カフェスタイルは、都内の献血ルームでもその広がりを徐々に見せている。このような若者文化に寄り添った取組は、今後若年者への献血推進に繋がると考える。

P-087

固定施設における大学生の献血協力者確保の取り組みについて

秋田県赤十字血液センター

伊藤陽介、金 句子、土田睦子、高嶋和弘、
國井 修、阿部 真、面川 進

【はじめに】 少子高齢化、人口減少が進む秋田県では年々、献血者確保が困難な状況で、固定施設においても平日の400mL献血・血小板成分献血の確保が課題となっている。医療機関からの需要に応じた採血計画と400mL献血率の向上を目的に、200mL献血・血漿成分献血の受け入れ制限を行った結果、固定施設では高校生・大学生からの協力が大幅に減少した。

【目的】 秋田県赤十字血液センター中通出張所（アトリオン献血ルーム）における平成25年度の大学生の協力者数は1,570名、平成26年度は1,097名、と473名の献血者が減少しているため、平成27年度よりアトリオン献血ルームでは若年層献血者確保対策として大学生を対象とした献血者確保に取り組んでいることから、その啓発の実施内容について報告する。

【内容】 アトリオン献血ルームでは、秋田市内の大学4校・短期大学1校・看護学校1校で構成される献血推進団体の秋田県学生献血推進協議会（構成員240名）を核として、平成27年5月から月2回アトリオン献血ルームにおいて学生による勧誘活動を実施した。この際、Facebook・Twitter等でのSNSを活用した。また、秋田県学生献血推進協議会の加盟校内で献血ルーム認知のためのチラシ配布・PR活動をルーム職員が学生とともに実施した。

【結語】 血液事業での若年層への献血啓発は大きな課題である。若年層献血者確保のため、地域における学生献血推進協議会との密な協力体制の構築と組織拡大支援は重要と思われる。今後も大学生を対象とする啓発活動は継続するべき取り組みと考える。

P-088

塚口献血ルームにおける近隣学校PTA・育友会、学生などの協力団体献血推進活動について

兵庫県赤十字血液センター

戸田広志、加藤義人、藤川美紀、平川通夫、
福井孝之、布一 正、三木 均

【はじめに】 当献血ルームは、阪神間東部に位置しているが、開設20年経過し、少子化、若年層の献血離れ、頻回献血者の高齢化等で献血者が減少傾向となった。献血者の安定確保のため近隣学校の協力団体（PTA・育友会や生徒）を対象として実施した説明会について報告する。【方法】 PTAや育友会の献血協力は、移動採血車による年1～2回の学校への乗り入れでの協力が主であった。成分献血の推進、複数回の献血協力をお願いするため平成16年から献血依頼文書の送付を行っていたが、少子化や若年層の献血離れの影響から献血協力も減少傾向となった。新規および継続した献血協力者を確保するために、平成23年度から依頼文書の送付と同時に献血説明会を行い、献血ルームでの協力をお願いした。【結果】 平成25年度は、S小学校のPTA役員が実際に献血に参加し、その様子を地域に向けたチラシとして作成、広報活動に活用した。またA高校PTAは、平成26年度に生徒に向けて校内放送を利用した献血の呼びかけを行い、生徒の献血協力が増えた。そのため今年度の学園祭でも献血推進ビデオ放映など保護者による生徒への献血の推進活動を企画している。説明会を行うことで、献血の必要性や正しい知識を理解いただき、PTA・育友会等団体による献血は過去4年間に於いて一定の協力がある。平成26年度、塚口ルームの若年層の総採血数は微減となってしまったが、説明会及び献血推進活動を実施した学生の献血は、増加した。【考察】 献血説明会を実施し、献血の必要性をより理解いただくことにより、近隣の各学校PTA・育友会の方からも地域の方、学生に向けて献血の必要性を呼びかけることで、全国的な課題でもある若年層への献血推進にもつながる。学校を発信源とした地域一体となる献血への取り組みを強化し、継続して行きたい。

P-089

新岐阜献血ルームにおける高校生献血者の現状

岐阜県赤十字血液センター

玉井裕子、佐橋昌邦、熊田 由、筒井いずみ、
香田昌宏、小池則弘、林 勝知

【目的】近年若年層献血者の減少が著しい。その対策として当ルームでは平成26年度は高校生の献血を呼びかけるパンフレットを作成し、春と冬の2回にわたり高校に配布した。その結果、平成26年度は高校生献血者の受付者数が一昨年前よりも180名増えた。今後さらに有効な高校推進方法を模索するために、新岐阜献血ルームに来所した高校生の在席学校を調査した。【方法】平成26年度に新岐阜献血ルームにて献血受付を行った高校生690名のうち高校名を確認できた637名を対象とした高校ごとの献血者数を調査した。加えて、新岐阜献血ルームから各高校までの直線距離を測り、距離と献血者数の関係を調査した。【結果】新岐阜献血ルームからの距離が2km圏内の高校6校からの来所者数が233名であり高校生献血者の37%を占めた。2～4km圏内の高校8校からの来所者数が133名であり高校生献血者割合は21%、4～6km圏内の高校7校からの来所者数が76名であり高校生献血者割合は12%、6～8km圏内の高校3校からの来所者数が53名であり高校生献血者割合は8%、8～10km圏内の高校5校からの来所者数が50名であり高校生献血者割合は8%であった。10kmより遠い高校29校からの来所者数は92名であり高校生献血者割合は14%であった。【考察】4km圏内の高校からの協力が高校生献血者の半数以上を占めており、新岐阜献血ルームから近い高校ほど献血協力者が多い。このことから、距離の近い高校にはアプローチ回数を増やし、距離が遠い高校にはアクセス方法を示した地図を作成し、その学校の学生に配布するなど、高校への推進活動にあたり、所在地に合わせて推進方法を変えることにより効率の良い推進活動ができると考えられる。

P-090

学生ボランティアの新規開拓について
～学生キャンペーンを通じて～

宮城県赤十字血液センター

青木利昭、佐藤優衣、渡邊明博、高橋勝彦、
木村康一、大場保巳、白取靖士、中川國利

【はじめに】当センターでは、若年層対策の一環として、学生ボランティアの新規開拓を目的に全国学生クリスマスキャンペーンを通じ、新たな取組みを実施したので報告する。【方法】同キャンペーンは、各大学の赤十字奉仕団による呼掛け活動を中心に実施してきたところであるが、今回、学生が出演者となるライブ等のステージイベントを県内で初めて企画し、出演者の募集と学域献血時の活動を前提としたボランティア登録を各大学の学生会、サークル、学内各種団体に対して依頼した。併せて、参加団体及び友人等へ献血協力のお願い等、声掛けを依頼した。【結果】1つの大学学生会から6名、3つの大学から6団体56名のボランティア登録が得られた。また、同キャンペーン時の若年層献血実績として、昨年時受付10名・採血5名が、今回のキャンペーンにおいては、受付55名・採血35名の協力が得られた。なお、本年度（4・5月）の学域献血において、声掛け等引続きボランティア活動の協力を得て、昨年同時期の受付平均46名が平均57名、採血平均30名が平均39名と昨年を上回る実績が得られた。【まとめ】今回の参加学生からは、「献血を身近に感じるようになった」、「ボランティアに参加し、献血の重要性が理解出来た」等、様々な声を得られた。また、新規学生ボランティアを開拓、増員することにより、学域献血時の協力数増加が見られる等、一定の成果を得ることが出来た。最後に同世代の学生から学生への声掛け、アプローチは非常に有効な手段であることが確認出来た。今後、更にサークル等へ学生キャンペーンへの参加とボランティア登録を積極的に働きかけ、学生が気軽に献血活動へ参加出来るような環境作りを目指す。